

メジロの繁殖

与那城 義 春

(沖縄県立博物館)

Notes on the Breeding of *Zosterops japonica*

in Chinen High School of Yonabaru Town, the Okinawa Prefecture

Yoshiharu YONASHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

メジロ *Zosterops japonica* の生息場所は平地林や低山地の森林である。特に温暖地域の常緑広葉樹林には多数の本種が生息している。食餌は昆虫類やクモ類を捕食するほか、花蜜や完熟期の果実も大好物であり、採餌のために人家付近の樹木にも飛来する。メジロの目の周囲には白色の輪があるので目立つほか、清澄な美声で鳴くので多数の人々に好印象を与えていている。

メジロ *Zosterops japonica* の分布は朝鮮南部、中国中南部、日本、台湾、インドシナ北部を含む広範囲であり、殆どの分布地域では留鳥として繁殖する。だが、日本では留鳥又は漂鳥として概ね全国的に分布しており、冬季になると北部地域や山地の本種は温暖地に移動しているようである。

本邦ではメジロの繁殖に関する研究が宮下（1975）によって報告されている。

沖縄県のメジロ *Zosterops japonica* は多数の島々で殆ど留鳥として生息し、繁殖している。本種の生息・繁殖場所は平地や低山地の常緑広葉樹林であるが、時には住宅地域のガジュマルやカンヒザクラなどの樹木でも繁殖している。

県内に生息するメジロの繁殖に関する調査・研究は殆どなく、断片的な観察記録が散見されるのみである。

筆者は身近な留鳥として多数の県民に知られているメジロの繁殖生態（1993年）を調査したので、その繁殖状況を報告する。

1. 調査地の概況

メジロの繁殖調査は沖縄本島南部地区与那原町内の東部に位置する県立知念高等学校の校内で実施した（図1）。校内の南部地域には大部分の校舎が建設されているほか、その附近には栽培されているカンヒザクラ、デイゴ、ホルトノキなどの各種樹木も成育していた。

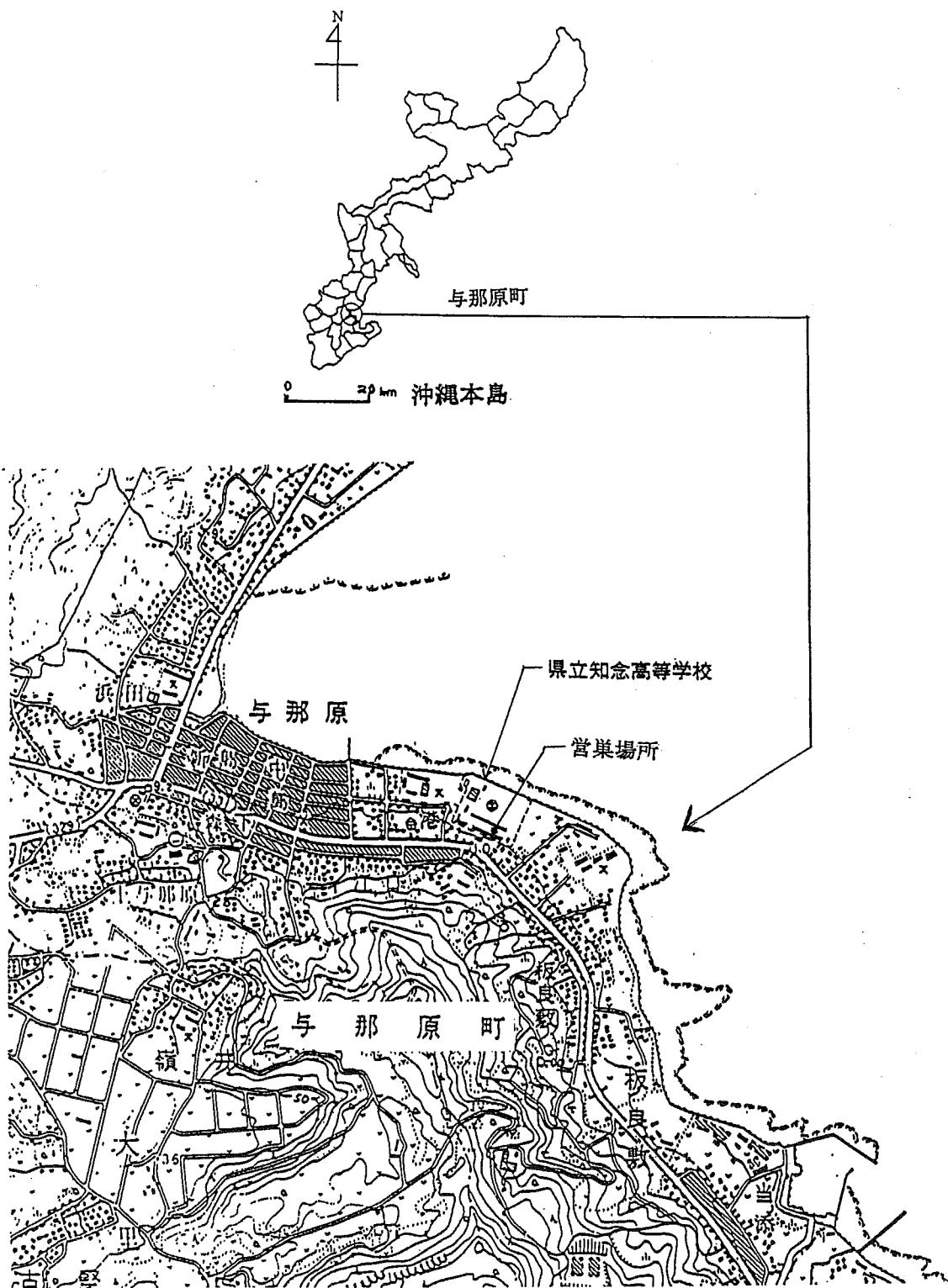


図1. 県立知念高等学校と調査場所の位置図

メジロの営巣木は職員室の裏側に栽培されているデイゴである。その樹高は約11mであり、職員室上部の3階にある生物教室のベランダ付近で枝葉が相当繁茂していた。

メジロの巣はデイゴの小枝の先端部から二叉状（V字形）に伸びている2本の細い葉柄に吊り下げられており、地上高約7.5mの位置にあった。

営巣木のデイゴは繁茂している枝葉で巣の周辺を殆ど被覆している状態であるが、その樹木に隣接して体育系の部活動準備室（トタン小屋）があり、放課後になると多数の生徒達が頻繁に入出するので多少騒々しい状態になる時もあった。

2. 調査方法

今回、メジロの繁殖調査は巣を中心に、造巣期から産卵・抱卵期、育雛・巣立ち前までの実態を定点観察で実施した。観察場所は校舎の3階にある生物教室裏窓側のベランダに設定し、自然状態でメジロの繁殖実態を定点観察した。本種の繁殖調査時には必要に応じて双眼鏡（8×30）を使用した。

3. 調査結果と考察

(1) 造巣期

1993年7月9日午後1時30分、メジロが校舎3階にある生物教室のベランダ付近に伸びているデイゴの樹枝に飛来している。観察を継続していると、2個体の本種が交互に巣材を嘴で運搬していた。メジロがデイゴの樹枝上から飛去した後、造巣の位置や使用されている巣材を確認するためにベランダから双眼鏡で観察した。造巣の初期と思われる極めて粗雑な巣がデイゴの小枝の先端部から二叉状（V字形）に伸びている2本の細い葉柄にクモの糸でススキの穂とビニールの細い紐等を接着して吊り下げられてあった。

午後4時10分、造巣の進捗状態を確認するために生物教室のベランダに出ると、営巣木のデイゴ近辺にある体育系の部活動準備室内から生徒達の賑やかな声が聞こえてきた。双眼鏡で観察すると、メジロの巣は楕円形であり、巣材はススキの穂やビニールの細い紐、チガヤの穂をクモの糸で接着しているが、チガヤの穂は殆ど産座に使用されていた。

ところで、本日の放課後の観察時にメジロは巣や営巣木の樹枝にも全然飛来しなかったが、その営巣木付近の一時的な状況変化による影響を受けているかも知れない。しかし、その巣は概ね完成しているようであり、今後の繁殖行動に備えて雌雄とも他の場所で採餌している可能性もある。

沖縄本島内でメジロの巣材は殆どススキの穂やビニールの細長い紐、チガヤの穂をクモの糸で接着しているが、そのほかにチガヤの細長い枯れ葉や枯れている雑草（イネ科植物）の細長い茎などが使用されていることもある。造巣期のメジロは生息場所付近で使用可能な巣材を巧妙に活用するようである。

(2) 産卵・抱卵期

7月10日午前7時55分、繁殖行動を確認するために生物教室のベランダから観察すると、メジロが巣の中に座っていた。多分、産卵するために雌が入巣しているのであろう。そのメジロは約10分後に巣から東側の雑木林付近に飛去してしまった。巣の中を双眼鏡で観察すると、産座に1個の白色卵が確認された。

7月12日午前7時40分、入巣しているメジロは殆ど動かない状態で座っているが、約15分後に別個体が巣付近の樹枝に飛来すると、巣の中にいたメジロは東側に飛去した。その後双眼鏡で巣の中を観察すると、産座に3個の白色卵が確認された。間もなく、樹枝上のメジロが入巣して抱卵した。多分、本日の早朝に最終卵（3個目）を産出した雌のメジロは産卵直後から抱卵開始し、雄親が飛来した時に抱卵を交代するのであろう。

7月14日午前7時50分、生物教室のベランダから巣を観察すると、メジロの親鳥は抱卵に専念しているようであり、巣の中で殆ど動かない状態であった。約10分後、別個体が巣付近の樹枝に飛来したため、そのメジロは直ちに巣から飛去してしまった。巣の中を双眼鏡で観察すると、7月12日に確認されている産卵数と同数の3個であった。その後、デイゴの樹枝上に飛来していた別個体のメジロが入巣して抱卵交代した。

午後1時20分、校内は昼食時間であり、食事のために多数の生徒達が歩き回るようになる。メジロの営巣木付近も生徒が往来している。その時、生物教室のベランダから双眼鏡で巣を観察すると、メジロは抱卵に専念しており、生徒の往来による影響は受けてないようである。約17分後、本種の別個体が巣付近の樹枝に飛来したので、抱卵していた親鳥は飛去した。間もなく、樹枝上の別個体が入巣して抱卵交代した（写真①）。

7月21日午前7時45分、メジロの親鳥が抱卵開始してから10日目である。双眼鏡で観察すると、今朝もメジロは抱卵中のようにあり、巣の中で殆ど動かない状態を維持している。約5分後に別個体が巣付近の樹枝に飛来したので、巣の中にいる親鳥は飛去した。その時、産座には3個の未孵化卵が確認された。間もなく、樹枝上の別個体が入巣して抱卵交代した。

抱卵期間のメジロは空腹感等によって卵を放置したりせず、雌雄交代で絶えず抱卵を継続していた。



写真① 抱卵中のメジロ

(3) 孵化・育雛期

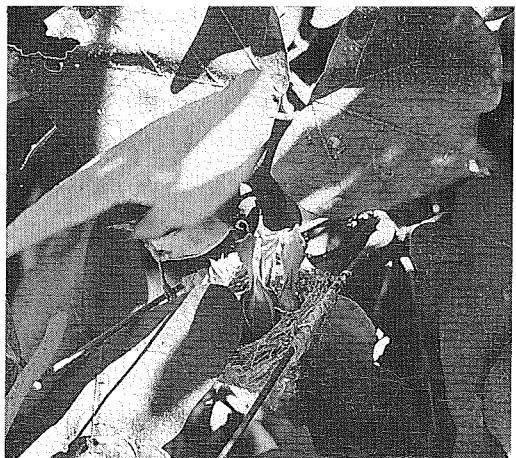
7月23日午前7時30分、双眼鏡で観察すると、入巣しているメジロの親鳥は中腰の体勢であり、時々ゆったりとした状態で身体を左右に動かしたりしている。約20分後、別個体のメジロが巣付近の樹枝に飛来したので、巣の中の親鳥は直ちに飛去した。その時、産座には孵化した3羽の雛が確認された。雛の身体は淡紅色であり、羽毛は3羽とも未だ生えてなかつた。円形の突起状である目は黒青色であった。間もなく、別個体が樹枝上から巣に移動すると、3羽の雛は頭頸部を持ち上げながら嘴を開けて食餌の要求行動を表示したので、その親鳥は3羽の雛に1回ずつ給餌(写真②)した後で抱雛した。

7月27日午前7時45分、メジロの雛の羽毛は頭頂から後頭部、背面の中央部、肩の部分に生え始めている。しかし、目は孵化直後と同様ような状態であり、鳴き声も出してない

ようである。でも、3羽の雛は帰巣する親鳥の気配や鳴き声等に敏感であり、巣の中で頸部を上方に伸ばしながら嘴を開けて餌を要求している。

7月31日（土）午後1時10分、メジロの雛は孵化日から9日目であり、巣立ちが近づいているのであろう（写真③）。親鳥は不在であるが、雛は3羽とも巣の中で頸部を上方に伸ばした状態で嘴を開けて食餌の要求行動を表示している。雛は概ね順調に成育しているようであり、その羽毛は背面や翼、胸部から腹部にかけて殆ど密生している。ところが、目の周辺や頸側部、後頸部の羽毛は疎らな状態であり、淡紅色である皮膚の露出部分も観察されたのである。

8月2日午前7時40分、3羽の雛は巣の中で立ち上がった体勢を維持し、頸部を伸ばした状態で嘴を開けて食餌を要求している。時々、雛は翼を広げて羽ばたいたりしている。約8分後、帰巣したメジロの親鳥は立ち上がって3羽の雛に給餌したが、給餌の終了直後に飛去してしまった。



写真② 雉に給餌するメジロの親鳥



写真③ 巣立ち前のメジロの雛

(4) 巣立ち

8月3日午前7時25分、生物教室のベランダから双眼鏡でメジロの巣を観察したが、3羽の雛は既に巣立ちした後であった。営巣木のデイゴや付近の樹木でもメジロの親子は観察・確認されなかった。

今回、メジロの雛の巣立ちは孵化日から11~12日目であった。

要 約

1. 平地林や低山地林に留鳥として生息するメジロ *Zosterops japonica* の繁殖生態調査を1993年に沖縄本島南部地区与那原町内にある県立知念高等学校の校内で実施した。

本調査はメジロの造巣期から抱卵期、雛の巣立ちまでの繁殖生態を可能な限り自然状態で定点観察した。

2. メジロの営巣木はデイゴ（樹高約11m）であり、雌雄によって地上高約7.5mに位置する小枝の先端から二叉状（V字形）で伸びている2本の細い葉柄に造巣された。メジロの巣は小型の椀形であり、巣材はススキの穂や細いビニール、チガヤの穂などをクモの糸で接着して葉柄に吊り下げられてあった。

メジロの造巣は短時間（3時間前後）で完成させるようであるが、今回の所要時間は未確認である。

3. メジロの産卵数は3個であった。これまでに沖縄本島内で確認されている1巣の産卵数は通常3~4個であるが、時には5個を産卵することもある。

4. 今回、メジロの抱卵日数は11~12日であった。親鳥は空腹感等によって途中で卵を放置したりせず、雌雄交代で絶えず抱卵していた。

5. 育雛期の親鳥は給餌活動を雌雄で実施し、給餌後の抱雛行動は孵化日から概ね3日目まで観察されたが、雛の就眠後に親鳥は直ちに飛去した。

育雛中期頃までの親鳥は頻繁に給餌活動を実施していた。しかし、巣立ち前になると親鳥は給餌回数を減少させることによって雛の巣立ちを促進させているようであった。

雛の巣立ちは孵化日から11~12日目であった。

文 献

日本鳥学会編、1974. 日本鳥類目録 P.91. 学習研究社. 東京

羽田健三監修、1975. 野鳥の生活 P.91~95. メジロ（宮下稔 執筆）築地書館. 東京

清棲 幸保、1978. 日本鳥類大図鑑 I P.79~82. 講談社. 東京

高野 伸二、1981. 日本産鳥類図鑑 P.365. 東海大学出版会. 東京